

『普勸坐禪儀』ノート（その一）

神 戸 信 寅

第一章 正しい坐禪への序説

『普勸坐禪儀』は、その題目が示すように、「正しい坐

禪の本旨と威儀作法を普く勧めたもの」といえる。さらに換言すれば、釈尊が菩提樹下において悟られた「悟りの世界」と「悟りの道」を、釈尊以来歴代の仏祖がたも行じてきたところの「坐禪」に見出し、それを普く勧めるため開示されたものといえるのであって。大きく第一章、「正しい坐禪への序説」。第二章、「正しい坐禪の本旨と威儀作法」。第三章、「正しい坐禪の勧め」と分けることができよう。

この書は、道元禅師（以下、禅師）が嘉祐三年（一一〇七）の九月中旬、宋より帰国されてまもなく、おそらくとも

安貞と改元された十二月十日までに撰述されたものといわれる。このことは『正法眼藏』「辨道話」に「嘉祐のころ」とあり、『普勸坐禪儀撰述由来』にも「嘉祐中」とあることが、その撰述年代を示している。

また、何故、帰国早々、禅師は『普勸坐禪儀』を撰述されたかについて、『普勸坐禪儀撰述由来』は、吾朝にて未だ聞くことのできなかつた正しい坐禪を伝えること。それによつて、連屋連牀を建て『百丈清規』を制定した百丈禅師（七二〇～八一四）の古意を復興し、達摩大師の真風を高揚しようとしたこと。さらに、『禪苑清規』（一一〇三）にも坐禪儀があるが、それには編者宗蹟の新条が添えられており、正しい坐禪が埋没される恐れがあるから、それを修訂すること、といった理由を示している。

〔普勸坐禪儀〕ノート（神戸）

【普勸坐禪儀】ノート（神戸）

そこで、この『普勸坐禪儀』であるが、現在、自筆本（天福本）と流布本との二本が伝わっている。この一本というものは、「天福元年中元日書「千觀音導利院」と奥書があるよう、帰国して六年後の天福元年（一一三三）、禅師三十四才の時にあらためて書かれた永平寺藏の自筆本（八八一字）と、『永平元禪師語録』（延文三年一三五八初刊）と『永平広録』（寛文十二年一六七二初刊）巻八等に収められている筆写年代不詳の流布本（七五六字）とである。

両者の間にはかなり字句に相違があることが指摘されているが、一般に自筆本は嘉祐三年帰国当初に撰述されたものを、天福元年に觀音導利院興聖寺で淨書されたもの、あるいは修訂された修訂本とされる。そして、流布本は天福元年の自筆本を、その後さらに禅師自身が推敲修正されたものといわれているのである。⁽²⁾

そこで、以下、『普勸坐禪儀』の内容を本文に添つて理解してみたいと思うのであるが、それには『普勸坐禪儀聞解』とか、『普勸坐禪儀不能語』とかの注解、その他の研究書により、ある程度の理解は得られるわけである。しかし、ここでは、そういったものに執われることなく、まず禅師の『普勸坐禪儀』そのものにかえり、原点に還つて問

い直してみたいという、まったく素朴な動機から、そこに書かれている文字の意味を理解するという基礎的作業を踏えあらためて古人の注解等を見直し、私なりに理解しようとしたものである。尚、本文は「流布本」に、訓讀は一般に読誦している訓み方に、各段落は原則として、『普勸坐禪儀講話』（泰慧玉著昭和四十年曹洞宗々宗務序刊）の六駢儂図によつた。

この章（正しい坐禪への序説）は、便宜的に、悟りの世界・衆生の世界・悟りの道、と区分することにした。それは、この章において禅師は、最初に「悟りの世界」という真実の世界を説き、次いで「衆生の世界」という真実の世界から離れた現実の世界を説き、最後に「悟りの道」という真実の世界を行じる道（坐禪）を説くことにより、第二章の「正しい坐禪の本旨と威儀作法」が説かれる序章の役割をはたしているからである。更に、この第一章の構造は四諦の苦集に「衆生の世界」を、滅に「悟りの世界」を、道に「悟りの道」をあてはめるとすれば、この章は、まさに四諦の苦集滅道に比すべきものといえるであろう。

（注）

（1）『普勸坐禪儀撰述由來』には、以下のように述べられていて

る「教外別伝正法眼藏、吾朝未嘗得聞。矧坐禪儀、則無今伝矣」

予、先嘉祿中、從宋土歸本土、因有參學請、□□□□。不レ
獲、已赴而撰之矣。昔日百丈禪師、建連屋連牀、能傳少林之
風。不レ同、從前葛藤□□。學者知レ之勿混亂矣。禪苑清規曾
有「坐禪儀」。雖順百丈之古意、少添頭師之新條。所以略有
多端之錯、廣有昧沒之失。不知言外之領。何人不レ違。今
乃抬見聞之真訣、代心表之裏受而已。」（曹洞全書宗源下二
六四頁）

(2)『2道元禪師語錄』（大久保道舟博士訳注、岩波文庫）の
解題を初め、一般には嘉祿のころ撰述した「普勸坐禪儀」を天福
元年に淨書した「淨書本」としているのに対し、古田紹欽博士は

『正法眼藏の研究』（昭和四十七年創文社刊）において嘉祿のころ
撰述したのを天福元年に修訂した「修訂本」と主張している。ま
た、『道元禪師語錄』の解題には、宗頤の刪定した『禪苑清規』

における「坐禪儀」と、禪師の自筆本（天福本）「普勸坐禪儀」
における字句の類似箇處を左側に黒点でもつて示し、道元禪師が
宗頤の「坐禪儀」を修訂増補して「普勸坐禪儀」を撰述されたも
のであることを述べている。さらに、自筆本「普勸坐禪儀」と流
布本「普勸坐禪儀」との比較対照は秋重義治博士の「普勸坐禪儀
考」（九大哲學年報第十四輯）に詳細になされ、流布本が後年、
宗頤の「坐禪儀」における宋朝禪の眞味乃至習禪的傾向を完全に
払拭するために、自筆本の「普勸坐禪儀」がさらに、禪師自身に

〔普勸坐禪儀〕ノート（神口）

よって書き改められていったものであることを論証している。

その他、『坐禪儀と天台小止觀』（山内舜雄博士、宗学研究第
八号）には、天台小止觀から宗頤の坐禪儀、そして自筆本普勸坐
禪儀といった流れを比較対照しながら、道元禪師が独自の坐禪儀
を構成していった過程を明かにしている。

尚、『正法眼藏』にも「坐禪儀」「坐禪儀」がある。ともに
『普勸坐禪儀』をもとにして記述したもので、「坐禪儀」は仁治
三年（一二四二）興聖寺において主に坐禪の本旨を、「坐禪儀」
は寛元元年（一二四三）吉峰寺において記されたもので、示衆は
吉峰寺においてなされている。

悟りの世界

第一段（本文） (訓読)

原夫、原ぬるに夫れ、
道本円通、争仮修証。道本円通、争か修証を仮ら
宗乗自在、何費功夫。ん。宗乗自在、何ぞ功夫を
費やさん。

(字解)

△原夫。原は泉水の出づる所、また、泉水の本、元などと
いうように、嚴下に泉の出る意で、水の出る始本のこと。
夫は「一」と「大」の合字で、「大」は成人の身体の全象

『普勸坐禪儀』ノート（神戸）

形であつて、一人前の男の意、大夫のこと。また、改まつた氣持で文をおこし、物事を述べるのに用いる。△原夫△は『聞解』に「仏法の根源を説出さんとして、發せらる詞なり」とあるように、仏法の根源である「道本」「宗乘」を説き出さんとするものである。さらに「原」の字義が「道本」（宗乘）そのものの真意を象徴的に明示しているかのようである。それは、「道本（宗乘）」が、ちょうど嚴下から滾々と自然に涌き出て囲りを潤すところの雑りつけのない「泉」、いわば純一無雜の「真水」に比せられていることである。その故か、『永平広録注解全書』（伊藤俊光氏編纂）にある「門鶴本」には「原ヌルハ夫道本……」と訓読している。△道本円通。道は道と走の合意で、人の行く一直に達（通）つた所の道で、しかも一步一歩足を踏みつけていく道路の意。本は木の幹根の象形で物事の起る所の意。△道本△は一般に「道」と「本」とは同格で「道そのもの」の意とされている。即ち、「悟りの世界」のことであるが、さらに釈尊の悟られたこの「悟りの世界」を、「道」という悟りの道と、「本」という悟りそのものに承当しているといふこととの二面あることを暗示したものといえる。換言すれば、「悟りの世界」における二面性を「道本」とし

て示したものである。田は鼎の口のように円の象形。通は道が行き止りでなく貫通（徹）し、貫洞せざる所のない意△円通△は「道本」の世界が円満融通なることをいったものであり、『聞解』には「性体周徧なるを田といい、妙用無碍なるを通という。」とある。△争坂・修証。争は「力」と「又（手）」と「一」との会意で、力のはいった臂を引き止める意。また、「仄」と「又」と「一」で、上からと下からと互に「一」をつかんで引きあらそう意ともいう。「争でか」と副詞にもちいれば「どうして」という疑問の意。假は人が仮面を蒙った意で、本物でなく偽物のこと。修は「サンに従いヨウの声」の形声で、攸の延長義が「掃う」であり、ヨウは髪飾のこと、よって、きれいに掃い飾る意。仏法にては行を修すること。証は明白に真実を申告する意。確かなしるしで、仏法にては証悟、悟りを実証すること。△修証△といえば、修行と証悟のことであるが、ここにいう「修証」は「道本」という悟りの世界における「修証」であつて、「本証妙修」という時の「妙修」と「本証」の意。また、禪師が『永平広録』卷五、『正法眼藏』「洗淨」の卷において述べられているところの「不染汚の修証」の意であつて、『景德伝灯録』卷五南岳の章に、それをみる

と「祖曰、還可修証否。曰、修証即不無。污染即不得。祖曰、只此不污染、諸仏之所護念。汝既如是、」と述べられているものである。△宗乗自在。宗は「ム(廟)」と「示(祭祀)」の会意で、転じて本源等の意。乗は人が木の上にのった象形で、転じて運載の意。△宗乗で「道本」と同じく「悟りの世界」を示している。しかし、「道本」に対比すれば、「宗」は「本」に、「乘」は「道」となる。

自は鼻の象形で、鼻が自ら空気を引き込む呼吸作用から意が来ている。在は土が累積して川の塞った形で、物が現にそこにある意。△自在は「宗乗(道本)」の世界が自在なることをいったものである。『永平廣録』卷八には「重擔不_レ捨_レ肩、輕歩不_レ酸_レ脚。不_レ見、朝市沙場、本是自在円通之道場也」の語が見える。△何費(功夫)。何は人が荷物を背に負う意で、春秋時代から荷が用いられた。後、詞に通じて人を詰る意。また疑問の語として用いる。費は貝(貨幣)と弗(無)の形声で、貨幣を手元から無くすること。功は「工」と「力」の形声で、尽力して仕事をする意。夫はてだて扶助の意。△功夫は「修証」と同じく「悟りの世界」における「功夫」であって、『正法眼藏』「辨道話」に「いまをしふ工夫辦道は証上に万法をあらしめ、出

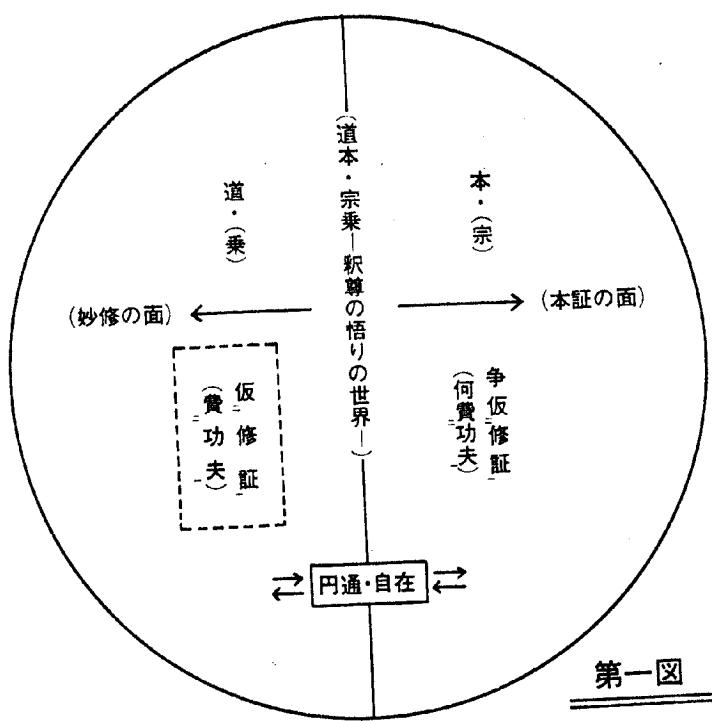
路に一如を行ずるなり。」といい、更に、『学道用心集』直下承当の章に「決_ニ拠_ニ身心_ニ自有_ニ兩般_ニ、參師聞法興_ニ功夫坐禪_ニ矣。聞法者遊_ニ化于心識_ニ、坐禪者左_ニ右_ニ行証_ニ」とあるように、坐禪に徹底する意であつて、さきの「修証」に通じているものである。

(ノート)

この段は、「悟りの世界」というものを抽象的にとらえその一般性を示そうとしたものいえる。即ち、「悟りの世界」のなかにおいて、修証、功夫がとらえられ、そのとらえかたが「道(乗)」の面に、あるいは「本(宗)」の面にというように開示されているわけであつて、第一図のように示すことができると思う。

この図からすれば、「争_ニ修_ニ証_ニ」。(何費(功夫))」は「本(宗)」の面に示されたものとして受けとることができるのであって、『正法眼藏』「現成公案」の巻にいう「万法ともにわれにあらざる時節、まどいなくさとりなく、諸仏なく衆生なく、生なく滅なし。」のように、修証功夫が有無の対立差別を超えた無我平等の立場においていわれたものであるとみることができるであろう。

『普勸坐禪儀』ノート（神戸）



第一図

これに對して、「道本（宗乗）」という悟りの世界において、「道（乘）」の面に修証、功夫をとらえるとすれば、やはり「現成公案」の「諸仏の仏法なる時節、すなはち迷悟あり、生あり死あり、諸仏あり衆生あり。」の立場にあたるものとみることができるものと思われる。そこで、図においては「仮修証」。（費三功夫）として、仮に示しておいた。しかし、一見相反した二つの立場は、道本（宗乗）という釈尊の悟りの世界の中において、表裏の関係をなししかも悟りの世界は円通自在に貫徹しているものであることが知られる。

このようにみてくると、道本（宗乗）という悟りの世界にあつては、「争仮修証」。（何費三功夫）」という時、ここにおける修証、功夫の要不要が問題とされているのではなく、修証、功夫それ自体のあり方が問題とされていることがわかる。そして、悟りの世界におけるあり方が修と証と分けられたあり方ではなく、修証一等、本証妙修としてのあり方であり、思量分別といった功夫ではなく、ただ尽力するといったあり方を示しているものといえるであろう。

第二段（本文）

（訓読）

況乎

況んや

全体迺出ニ塵埃ニ兮、孰

全体迺かに塵埃を出づ、

信ニ払拭之手段^一。

孰か払拭の手段を信せん。

大都不ニ離當處ニ兮、豈

大都当處を離れず、豈に修

用ニ修行之脚頭^一者乎。

行の脚頭を用ゆるものなら

んや。

（字解）

△況乎。…………者乎。況は一般には「矧」の意で、多く「况」字が使われ、「ますます」、「加うるに」、「その上に」の意となる。「いわんや」と読まれ、終りに「をや」と受けて、上の意を反照するを例とする。ここでは「況乎……者乎。」とある。者は此は此、彼は彼と事を別つ意。乎は語尾に添え、音調を助ける語より転じて、疑問、反語、詠歎、呼掛け、その他無意味の助辞として用いられる。△全体迺出ニ塵埃ニ兮。全は完きこと。体は身体の総称の意。△全体^一は身体の全部。部分を集めた全部でなく、身体そのものという当体の意。第一段の「道本」「宗乘」と同じく「悟りの世界」のことであるが、ここでは「悟りの世界」を抽象的なものから、具体的な「全体（人）」に示したもの

のといえる。即ち「悟りの世界」の方からの「人」としてとらえられているのである。尚、『正法眼藏』「辨道話」に「仏法には修証これ一等なり」。いまも証上の修なるゆゑに、初心の辨道すなはち本証の全体なり。」とあり、『永平伝記』卷八には「全体本然誰か処所に逗らん」とある。迺は走と同（はるか）の合字にて遠く遙なること。出は推なりで、推してすすむことから、出行の意。塵は三鹿と土とからなる会意で、鹿が群して迅速し、舞い飛ばす土の意。埃は風の為に揚い上る塵の意。△塵埃^一は俗世間ににおける色声香味触法六塵といった煩惱迷惑のこと。自筆本には「塵核」とあり、核は国の極地、数の極度の意で、十兆を京、十京を核という。今は庶きられた氣の分散する象である「八」と氣の伸びんとして庶きられた「弓」との合字で、語句の間、または語句の下に用いて音調を助ける字。△孰信ニ払拭之手段^一。孰は煮るの意の「享」と手に取る意の「丸」との合字で、食物のよく煮える意。また、誰に通じて、疑問の語として用い、おもに物を比べて、其の内にて何れがよいかと尋ねること。誰は広く一般の中より尋ねること。信は外に出す言が内の心と合することで、人の言語行事に相違のないこと。払は手で塵埃を除去する意。拭は

『普勸坐禪儀』ノート（神戸）

手で塵埃をふき清む意。△払拭△は塵埃をはらいぬぐうこと、けがれを去ること。「聞解」に「塵埃を出ずと云うより、払拭の語を引出して、六祖の頬の意を暗に含む」とある。六祖の偈とは『六祖壇經』にある偈で、「身是菩提樹、心如明鏡台」、時時勤払拭、莫使惹塵埃。』という神秀の偈に対する「菩提本無樹、明鏡亦非台、本来無一物、何處惹塵埃。』という六祖の偈のことである。之は草木の若芽が地中から出た形から、自然に湧き出る意。また「此」に仮借して上下の係属を示し、口調を緩くする助字。手は持、執、取のように物を「執持」するところからきた象形で、てだて、方法の意となる。段は「殳（積竹杖）」と出（手）の合字で、積竹杖をもって打たく意。△手段△は目的を達するための方法、てだて、「段」は助字。△大都不離△當處△弓。大は大人の正位した形で、大小の大の意。都是民の聚まる所を都といふところから、人の多く聚まつた邑の意。また、邑の宗廟、先君の主あるところから、国都の意。△大都△は「全体」と同じく「悟りの世界」のこどであるが、「全体」が「人」そのものを示したものとすれば、ここでの「大都」は一人一人の「人」を示しているといえる。したがつて、「悟りの世界」を「人」そのものか

ら、さらに広く「衆生」すべてにまであてはめて示したもの。不は弗に通じて打消の意で、「弗（不可）」は「不（非・未）」より意が強い。離は朝鮮鶯の意で、「はなれ」「へだたる」等の意に仮借して用いられる。當（當）は田と尚の形声で、田と相見合つて過不及のない意で、転じて事理宜しきにかなうこと。処は人が坐して側方に倚る形で、凡に倚りかかつて居坐する意。△當處△は「衆生」が当面しているこの處、その所のこと。△豈用△修行之脚頭者乎。豈は凱旋の音樂の意で、後、「あに」、「いつくんぞ」等の反語の意に用いられた。用は事を行うに古は、必ずト筮し中れば行つたことから、「ト」と「中」を合して施行する意、さらに使いもちいの意。行は「辻」と四方に通ずる十字道路の象形で、人が十字路に立つて歩み進みゆくこと。脚は歩行の時、後方に曲げる膝以下の部分、即ち胫の意で踏み出し行くこと、行脚の意。頭は首と豆の形声で、「かしら」の意。△脚頭△は歩を外に向けて求めて行くこと。「頭」は助字。

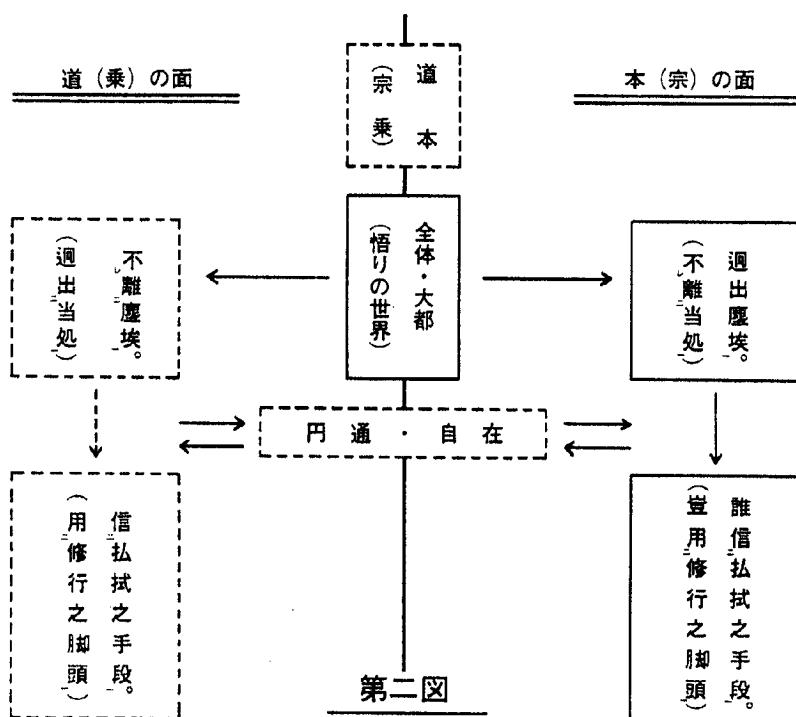
（ノート）

この段は第一段の意を反照したもので、「全体」、「大都」は第一段の「道本」、「宗乘」と同じく、「悟りの世

界」を開示したものである。しかし、同じ「悟りの世界」を示したものでありながら、「全体」、「大都」は「道本」、「宗乗」の抽象的な示し方に対し、より具体的な示し方をしている。さらに、この四つの語句を道本—宗乗—全体—大都と普べ比較してみると、そこには「悟りの世界」が仏法における一般的な「道本」という抽象的概念から、坐禅を中心に置く「宗乗」という抽象的概念に。そして、「全体」という具体的な「人」に示し、その具体的概念を広く「大都」として、すべての「衆生」にあてはめて展開していることが窺えるのである。このことは、道本—宗乗—全体—大都という語句の流れに、既に次の第三・第四段の「衆生の世界」への準備が暗になされていることがくみとれると思う。

それはさておき、この段は前段と同じく「悟りの世界」から「悟りの世界」が展開されているため、「塵埃」の出入といったことはなく、また「当處」を離不離するということもなく「悟りの世界」ばかりであるということである。それ故、悟りのために塵埃といった煩惱迷惑をはらいぬぐつて、なくそうとしたり、また、悟りの世界であるにかかわらず「当處」を塵埃に執われた衆生の世界と思つて

〔普勸坐禪儀〕ノート（神戸）



『普勸坐禪儀』ノート（神戸）

それを離れようとして修行するといった方法は、悟りの世界においてはありえないものである。たゞ、「全体（大都）」

という悟りの世界からの発現として悟りの事物が開示されるとみなされるのであって、第一図と同じように、「本（宗）」の面、あるいは「道（乘）」の面に示されているわけであるが、これは次の図（第二図）のようにあらわし得ると思う。即ち「全体（大都）」という悟りの世界をての線にみなせば、その右の面において、この段は示されているのである。そして、この立場から六祖大師と神秀上座の故事をみれば、六祖の偈は本（宗）の面に、神秀の偈は道（乘）の面に示したものといえるのであって、どちらも悟りの世界から悟りの生き方を示したものであって、そこに境界の深浅云々といったものは問題とされていないのである。ただ、そこには悟りの世界における示し方の相違を見るのみであるといえる。

衆生の世界

第三段（本文）

（訓読）

然而、

毫釐有差、天地懸隔。
毫釐も差あれば、天地はるか
違順纏起、紛然失心。

然ども、

毫釐有差、天地懸隔。
毫釐も差あれば、天地はるか
に隔たり。違順わづかに起れ

ば紛然と、して心を失す。

（字解）

△然而。然は肉と犬と火の合字で、犬肉を火にあぶり焼く意であるが、「然」字が「如斯」の意に使われ、上を承け下に接する語としたので、後世さらに火偏を加え「燃」とした。而は口の上ひげを象り、一説あご鬚ともいうが、爾と通じて語調を助ける辞となつた。△毫釐有差。毫は高い省画と毛の形声で、長く鋭い細毛の意。転じて、細く少い意。秤目、尺度の単位としては蚕の吐くいとを忽といい、十忽を絲といい、十絲を「毫」という。釐は釐と里の形声で、家の福の意。転じて、極少の数量の意。秤目、尺度の単位としては、十毫を「釐」、十釐を分、十分を寸といふ。

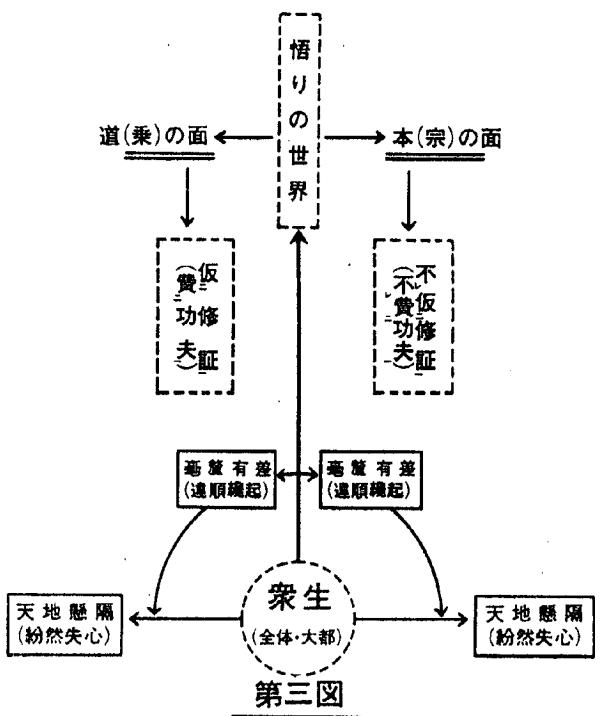
△毫釐はきわめて少ない分量の意。有は又（右手）と肉の形声で、手に肉を持つてすすめる意。また、又（右手）は能く物を取執するから、「取る」、「執つ」の意となり、さらに「有無」の「有」の意。差は草木の若芽が下垂して互い違いとなつて、そろわない意。△天地懸隔。天は一と大の会意で、至高無上のもの、さらに天空の意。地は土と也の形声で、地の延延としてうねうねしている意。天に対する地の意。△天地は上と下の意。懸はもと「縣」が首を木に倒縣する意であったが、郡縣の意に転用したため、

「懸」を以つて倒縣の意とした。隔は阜と鬲の形声で、内外を塞ぎへだつ意。△違順纏起。違は走と草(稽首の意)と川の形声で、離れて去つて行く意。順は貢(稽首の意)と川の形声で、稽首して恭順な意。△違順△違境と順境のこと。纏は糸と兜の形声で、雀の頭の如き色した帛。微黑色の意。才音に通用して僅の意。起は走と己の形声で、坐しているものが立つ意。△紛然失心。紛は糸と分の形声で、馬尾を包むふくろの意。後世は糸に通用して紛乱の意。然は物事を形容する語。△紛然△はとりみだすこと。「正法眼藏」「法性」には「飽葉林と自称して、曲木の状にのぼるもの、法性の声をきき、法性の色をみるに、身心依正、よのつねに紛然の窟坑に昇降するのみ。」とある。失は手と乙の形声で、手より物が離れ落ちる意。心は心臓の象形で、転じて意識、感情の府の意とし、また、物の真中の意。

(ノート)

第一、第二段までは、何時でも何處でもどんな事でも、ありとあらゆる物事が釈尊の悟りの世界を離れたものではなく、悟りの世界で悟りの人生を開示しているものであることが述べられている。それ故、塵埃という自我意識を生活の基盤としていると思われる「衆生」も、やはり、釈尊

「普勸坐禪儀」ノート(神戸)



『普勸坐禪儀』ノート（神戸）

の悟られた悟りの世界から離れることなく、「衆生本来仏」といわれるものである。即ち、衆生である我々も悟りの世界（道本・宗乘・全体・大都）と一体であり、そして、それと密接不離な関係にあるものとされるのである。

ところが、悟りの世界と一体であるはずの衆生が、塵埃

という自我意識に執われ、その立場から「悟りの世界」を求めて、本（宗）、あるいは道（乘）の面に修証（功夫）する所は誤りなく正しく視らるる意。さらに、目でまっすぐの自我意識によって修証（功夫）が本（宗）、あるいは道（乘）の方面に傾き示されれば示される程、「天地懸隔（紛然失心）」といった、まったく見当違いの方向に向つてしまふということである。そして、その基因は人間生活の基盤と考えられていた自我意識の中に悟りの世界を見出そうとすることによってであるといえる。何故ならば、悟りの世界の中に自我意識はあっても、自我意識の中に悟りの世界はないからである。

第四段（本文）

（訓読）

直饒、

誇^ハ会豊^ハ悟^フ、獲^ハ智地^ニ 会に誇り悟に豊かにして、智地

地の智通を獲。道を得心を明

之智通。

得^ハ道明^ハ心^ヲ、拳^ニ衝^テ天^メ めて、衝天の志氣を挙するも。
之志氣[。]

雖^ハ趙^ニ遙^ニ於^ハ入頭^ニ之^ヲ邊^メ 入頭の辺量に趙遙すといえど
量^一。幾虧^ニ闕^ニ於^ハ出身^ニ身^メ も。幾んど出身の活路を虧す。
之活路[。]

（字解）

△直饒。直は十と日と」（かくす意）の会意で、十日の見る所は誤りなく正しく視らるる意。さらに、目でまっすぐなおす意。饒は食と堯の形声で、食豊にして飽く意。さらには、「たとい……とも」の意で、唐の俗語でならぬ事であるけれども宥免してさせて見たる時はという意。△直饒△は「饒」と同じであるが、饒の意が強い。『聞解』には「直饒ノ二字ハ、仮設之辞ト注シテ、今現ニ見ハセネドモ、直饒見タトテモト、ミヌコトヲ仮設テ云辞ニテ、下ノ二十二字ヲ貫テ、ソノ事直ニ饒スココロナリ、碧巖ノ評ニ、コノ語ヲヨシ」と説明している。そして「碧巖ノ評ニ、コノ語ヲヨシ」といつていることからして、禅書に多く使われたものと思う。禅師は「直饒」という二字を、『永平広録』卷第三に「上堂。曰、天下太平、鉢盂处处喫^ハ飯。万姓安樂、露柱時時開^ハ花。所以迦葉微笑破顔、慧可礼拝得體。

直饒到達田地、更參三十年。」と使われている。△誇は會と曾の会意形声で、大言を吐いて人に驕る意。会は△と曾の会意で、一所に集合する意。ここでは会了、会得の意。豊は盛物の多く満ちたりた象形で、大いにゆったりとし満つ意。悟は心と吾の形声で、心の迷いで、猶に犬を使って確と得る意。さらに、してやつたりと手を拍つ程の意。譬は目と譬の形声で、物がちらりと目を過ぎる意。地は、転じて根源の意。また、助字として用いられる。△譬地は仏法の根源をちらりと見ること。智は物事を明かにすること。通は、転じて事理に明暁し、凝りなく一般に行き渡る意。△智通は『正法眼藏』「後心不可得」に「仏道の身心を保住すべくば、仏道の智通を學習すべし。」とあるように、悟りの世界に徹底すること。△得道明心令、得は手に貝(貨幣)を持つ意にイ(道路)の意の加わった字で、行つて得る所ある意。道は、たゞ一方に通じ人の行く道であるが、ここでは「悟りの世界」の中での道のこと。明は日と月とでその意を示す会意で、照らし照らされてあきらかなる意。心は中心、根源の意であるが、ここでは「悟りの世界」の中での「心」で、「道本」

【普勸坐禪儀】ノート(神戸)

における「本」の意。△拳・衝天之志氣。拳は興と手の会意形声で、両手で高く持ち上げる意。衝は行と重の形声で、天下の通道の意。さらに、向う、当る、突き進む意。天は仏法の根源、あるいは天地万物の根源、自然の理の意。△衝天は仏法の根源をつく勢い。志は之(往)と心の形声で、心の向い行く所。氣は米と氣の形声で、給料としてもらう米、あるいは客に贈る米の意。後、食扁を加え「餌」とし、「氣」をば空氣、呼吸の氣の意とし、さらに人体の勢力、意志、感情の意。△志氣はあることをなさんとする意氣。△雖・逍遙入頭之辺量。雖は虫と唯の形声で、蜥蜴に似た一種の虫の意。假借して不定の辞、発声の辞で、「いえども」の類に用いる。逍は走と肖の形声で、ぶらつく、さまよう、あそぶの意。遙は走と夕の形声で、さまよい行く意。△逍遙はあちこちぶらつくこと。入は穴、あるいは家の入口の意。頭は、転じて、ほとり、あたり、さかの意。△入頭は「悟りの世界」の入口のこと。辺は走と鼻の形声で、垂崖を行く意。転じて、ほとり、さかいの意。量は物の輕量、多少、長短をはかることで、是程といういっぱいの處の意。さらに思い及ぼす音。△辺量はほとりに思いを及ぼすこと。△幾麿・闕出身之活路。幾は絃と成の

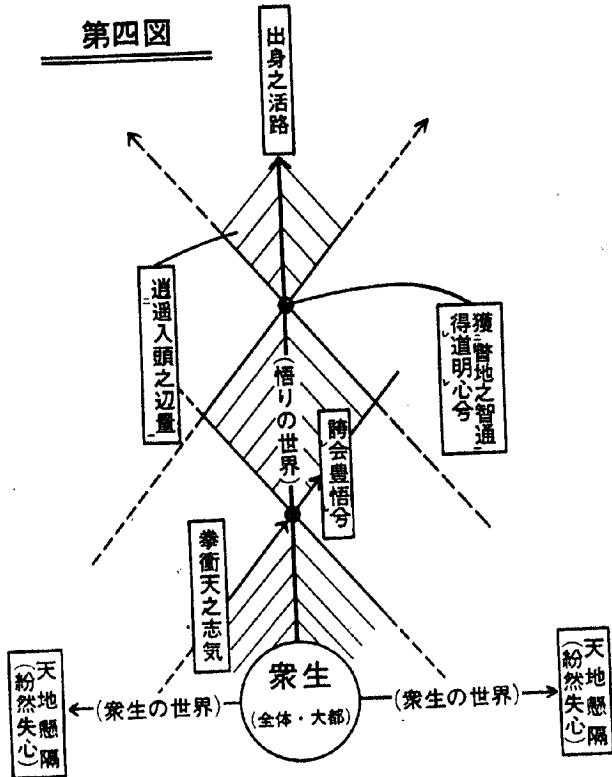
『普勸坐禪儀』ノート（神戸）

会意で、物の表れ出んとするきざしの意。転じて、「ほとんど」の意。虧は手と盾の形声で、氣の闕け損する意。闕は門と歎の形声で、失う、過す意。△虧闕△は欠け失うこと。「正法眼藏」「洗面」に「もし虧闕すれば 鳥の一翼おちたらんがごとし。一翼のこれりとも、飛行することあたはじ。」とある。出は一（幹）と口（枝）の象形で、草木の芽をだして成長する意。さらに、出行の意。身は腹中に、さらに一身ある人体の象形で、転じて、我身、自称の意。ここでは、塵埃に執われている我身のこと。△出身△は、もと支那で官史の國家試験に合格し、官史に挙げ用いられることがあるが、ここでは、塵埃という自我意識を離れ、本来の自己となり、悟りの世界から行なわれること。
『正法眼藏』「辨道話」には「本証を出身すれば妙修通身におこなはる」とある。活は水と舌の形声で、水の盛んに流れ動く意。路は足と各の形声で、人の行くべき道の意。△活路△は円通自在なる路。

(ノート)

前段において、全てのものは「悟りの世界」ただ一つであるにもかかわらず、現実における「衆生の世界」は塵埃という自我意識によって「悟りの世界」から離れた方向、

第四図



即ち、「天地懸隔。(紛然失心)」へと向かっていってしまったことが説かれたのであるが、この段では、この自我意識が基因となつてゐる「天地懸隔。(紛然失心)」の方面から「悟りの世界」の方向に向つた場合が示されているのであつて、第四図のように示すことができると思われる。

この図において、「衆生」から「出身之活路」に向い、それと一体となつた方向を中心とすれば、「天地懸隔。(紛然失心)」の方面から「悟りの世界」に向うといふことは、左右より中心に向うといふことである。そして、左右より中心に向かつて、「衆生」から「出身之活路」へといふ「悟りの世界」の線に交叉したところが「獲_ニ警地之智通」であり、「得_ニ道明_ニ心_ニ令」である。また、「悟りの世界」の線に向かつて「いく」とと、それから離れて「いく」とが「拳_ニ衝天之志氣」であり、「誇_ニ会豐_ニ悟_ニ令」である。そして、「逍_ニ遙入頭之辺量」といふことは、「悟りの世界」の線に向い離れていたのが、また、「悟りの世界」の線に向い離れていくといつたことで、「悟りの世界」の線を中心にして行つたり来たりする振幅内において示されてゐるものであろう。

〔普勸坐禪儀〕ノート（神戸）

即ち、「天地懸隔。(紛然失心)」へと向かっていってしまったことが説かれたのであるが、この段では、この自我意識が基因となつてゐる「天地懸隔。(紛然失心)」の方面から「悟りの世界」の方向に向つた場合が示されているのであつて、第四図のように示すことができると思われる。

この図において、「衆生」から「出身之活路」に向い、それと一体となつた方向を中心とすれば、「天地懸隔。(紛然失心)」の方面から「悟りの世界」に向うといふことは、左右より中心に向うといふことである。そして、左右より中心に向かつて、「衆生」から「出身之活路」へといふ

第五段（本文）

（訓説）

矧彼、

矧_ニや彼の、

祇園之為_ニ生知_ニ令、端

坐六年之蹤跡可_ニ見。

少林之伝_ニ心印_ニ令、面

壁九歲之声名尚聞。

古聖既然。

今人盍辨。

所以

須休_ニ尋言逐語之解行。

須學_ニ回光返照之退歩。

身心自然脱落。

本來面目現前。

欲_ニ得怎麼事、急務_ニ忘

怎麼事。

怎麼の事を得んと欲せば、急

に怎麼の事を務めよ。

（字解）

△矧彼。矧はもと弦と書き、弓と矢の会意形声で、況んや

「普勸坐禪儀」ノート（釋凡）

と詞を引き益す意。彼はイと皮の形声で、此処よりはるか離れた彼方の意。転じて此に対する彼で、事物を指す意。

の」と。昔、インドの舍衛国に須達長者 Sudatta がつて、釈尊及び衆僧の説法のために祇樹給孤独園に建てた寺で、王舍城の竹林精舎 Venuvana と共に二大精舎とされ、釈尊の説法も多くはこの二處においてされた。ここでは、釈尊のこと。為は作る、行う、治む等の意で、転じて、様、容、真似る、そのものになつた意。生は草が地上に芽を出し発育する象形。知は矢と口の会意形声で、詞に聞き心に覚ること矢の速なることの意。△生知△は生れながらにして知ること。学ばないで事理に通ずることの意で、聖人のこと。『正法眼藏』「大悟」には、人のもつて生まれた能力には多般ありとして「いはく生知、これは生じて生を透脱するなり、いはゆるは生の初中後際に体究なり。いはく学而知、これは學して自己を究竟す、いはゆるは学の皮肉骨髓を体究するなり。いはく仏知者あり、これは生知にあらず、學知にあらず、自佗の際を超越して塵裏に無端なり、自佗知に無拘なり。いはく無師知者あり、善知識によらず、經義によらず、性によらず、相によらず、自を撥転せざ、佗を

「互せざれども露堂堂なり。」と述べている。さらに、「自誼三昧」には「たとい生知といふとも、仏祖の大道はしるべきにあらず、学してしるべきなり。」としている。△端坐六年之蹤跡可見。端は立と端の形声で、立姿の正しい形で、跪が臀を下につけないのに対し、坐は臀を下において坐す意。尚、座は漢代の字で坐と同義に用いられたが、後、坐をするという動詞に用いた。△端坐▽は正しく坐禅すること。△六年▽は釈尊二十九才出家してから菩提樹下で成道するまでの苦行六年のこと。蹤は足と従の形声で、人のおこないのあとの意。跡は足と亦の形声で、歩いた道のあとの意。△蹤跡▽はあしあと、事跡。また、ゆくえ、ゆき方のこと。可は口と丁の形声で、宜しと認める意。助動詞「ベシ」の訓で然せらるる意、見は目と人の会意で、確かにみる意。みるといつてもみゆるという方に専ら用いられる。転じて、現わる、まみゆ、会う等の意。△小林之伝心印一分。△小林▽は達摩大師がインドより中国に渡って九年間面壁坐禅した小林寺のこと。河南省河南府登封県の嵩山別崇である少室山の北麓にあって、北魏の太和年間(四七七—四九九)孝文帝が仏陀禪師のために造立

した。寺の西北に達摩大師九年面壁の遺跡として、面壁庵ありといふ。ここでは、達摩大師のこと。伝は人を以てつたう、うつる等の意。印は爪と口の会意で、執政者のもつ瑞信即ち印塗の意。△心印は仏心印のこと。△では正伝の坐禅のことで、『正法眼藏』「三昧王三昧」に「世尊つねに結跏趺坐を保任します。諸弟子にも結跏趺坐を正伝します、人天にも結跏趺坐ををしめますなり。七仏正伝の心印すなはちこれなり。」とある。△面壁九才之聲名尚聞。面は百と外圍の口(顔の輪廓)による象形で、顔面の意。転じて内に対する外、裏に対する表、対面の意。壁は土石を以て築いた垣の意。△面壁は壁に面して坐禅すること。声(聲)は聲(聲の本字で、打って声を出す)との会意形声で、物の響により聞える声の意。名はタと口の会意で、自己の名を呼ぶ意。後世は一般に物の名称、転じてほまれの意。△声名はほまれ、よい評判、名声のこと。尚はハと向の形声で、何卒そうなれば仕合と希う意。副詞に用いて、過ぎ行ったものまだ残りある意。聞は耳と門の形声で、耳に音声を受けることであつて、きこゆる意。△古聖既然。古は十と口の会意で、多数の人の口に上つた事で今に対する過去の意。聖は耳と尾の形声で、何事

【普勸坐禪儀】ノート(神戸)

にも通せざる事のない人、転じて、知徳の最もすぐれた意。△古聖古往の聖人。ここでは、釈尊と達摩大師のこと。既に是と先の形声で、先に限りあるも其處迄行き届きつく意。副詞として、以前から、早くからの意。然は、その通りである。そうであるの意。△今人盍辨。今は古に対する現代、また昨今の意。△今人は当今の人、現代の人のこと。盍はもと益とかき、大と一と皿の会意で、皿に物を入れ之を覆う意。また、何不の音に通じて、「なんぞ……せざる」、「いつくんぞ……せざる」の意。辨は刀と辯の形声で、判ち別つこと。自筆本には「辨」とある。辨は力と辯の形声で、力を致す意となり、△では「辨」の意である。△所以。△所以は「故になり」の音便形「ゆえんなり」に起る語。ここでは、上段全部の句を受けて下の句を起しながら句。△須休尋言逐語之解行。須は彌(ひげ)と貞の会意で、ひげの意。後、影を加えて鬚と書く。また「べし」の意で、然することがいるいらぬの意。休は人が木蔭にやすらう会意で、しこいやすむこと。休止の意。尋は左と右と寸(法則)との会意で、左右の手を法則通りに拡げる意から、何かを手づるにして源を求めていく意。言は口と辛の形声で、心の思う処を口にいい述べる意。逐は走と

【普勸坐禪儀】ノート（神戸）

家の形声で、此方より逐い払う意。語は言と吾の形声で、難應答する意。さらに、人と応対する意。解は角と牛と刀の会意で、刀を取つて牛の角を解剖する意から、難處を説明、了解等の意。△解行△は理論と実践。ここでは經典・祖錄に執われること。學は教をうけ、無智を開き、まなび覚ること。回は物の廻転する象形で、グルグルとまわり取つてかえす意。光は人の上に火のある会意で、闇黒を明かに照らす光明の意。返は是と反の会意形声で、往いて復びかえり来る意。照は日光にて明なること。△回光返照△は仏光明を回し返して自己自身を照し出すこと。退は進と対し、後へすざりさがる意。歩は兩足を踏みし会意で、左右の足を一度宛前に出す意。△退歩△は進歩に対する時は前よりわるくなること、ここでは、他に對せず他に隨わず、したがつて自己を踏まえているところから「退歩」という。△自然△はおのずからそうであること。本来そうであること。脱は肉と免の形声で、肉のやせ落ちる意。転じて、除く、解く、免る等の意。落は艸と落の形声で、木葉の衰謝すの意。転じて、おつ、おとす、下る、脱する等の意。△身心脱落△は「全体廻出「塵埃」分」と合せ解すれば、塵埃といった執着、束縛が離れ落ちて「悟りの世界」に立つ

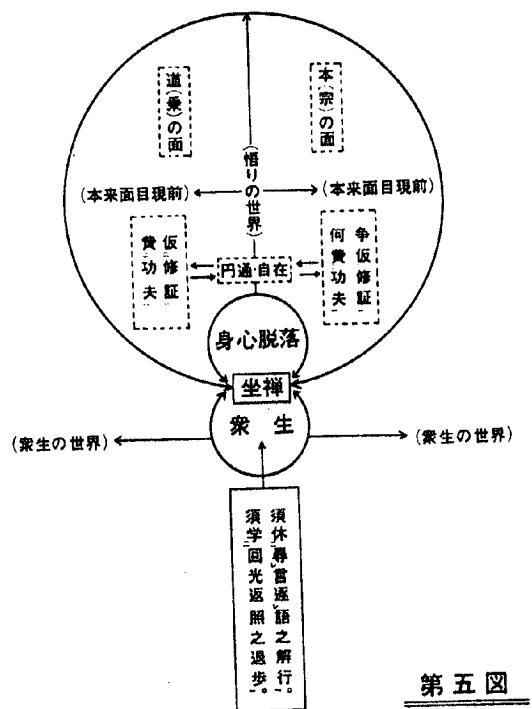
こと。来は上部を穂、中部を茎、下部を根の象形で、天より授かたむぎの意から転じて、きたる、いたる等の意。△本来△はもともと、元來の意。面は人面の象形で、裏に對する表、顔面の意。目は人の「め」の象形で、目中の黒目と瞼とを合せた通称。△面目△はありさま、様子で、貴尊の悟られた悟りの心。現は玉と見の形声で、玉の光、さらには見の義より隠れている物が上にあらわれる意。前は辯（進む）と刀の形声で、進み行く意。さらに、前後の前、向へよる、手前に寄す意。△現前△は目の前にあること。また、現われること。欲は谷と欠の形声で、願い求める心情の意。一般に欲を動詞、慾を名詞に用いる。得は得（貝と又の合字）に彳扁を加えた会意で、行って求める意。慾は任と心の形声で、思念すること。此の如しの意。麼は麻と幺の形声で、細微の意。△恁麼△は中国宋代の俗語で、什麼・甚麼・怎麼・與麼とも書き、「かくのことく」また、類を指示する意。ここでは、初めの「恁麼」が前文「自然身心脱落、本来面目現前。」を指し、後の「恁麼」は、自筆本に「急務三坐禪」にあるように「坐禪」を指している。事柄はあらゆることを記述する職のことから転じて、仕事、事柄、さらに使う、いとなむ等の意。また、一大事のこと。

息は及と心の形声で、心徧くしてあせる意。転じて、何事をして置きてもいそぐ意。務は教と力の形声で、物事に専心精出し、尽力して、その事を常に所作とする意。

(ノート)

第三段と第四段において、われわれ「衆生」の本来のあり方、生き方である「悟りの世界」に衝天の志氣をもつて行ったとしても、塵埃といった自我意識を基盤とした「衆生」であるがぎり、「衆生の世界」の方向から「悟りの世界」に向うこととなってしまったのである。そのため「悟りの世界」と一体となるどころか、「悟りの世界」と交叉し「衆生の世界」に逆戻りして行って、ますます「悟りの世界」から離れて行ってしまうこととなつたのであるが、この段では「悟りの世界」と交叉して「衆生の世界」に迷いこんでしまうのではなく、「悟りの世界」と一体となり、そこから離れることなく、悟りの人生が開かれていく道が示されている。それは、塵埃といった自我意識に執われた「衆生の世界」を基盤とするのではなく、「坐禅」を基盤とすることによってであるとしている。そして、釈尊や達摩大師でさえ、「悟りの世界」において「悟りの道」を歩むに「坐禅」を基盤とし、それを依り所としてきたのである。

『普勸坐禪議』ノート (神三)



『普勸坐禪儀』ノート（神Ⅳ）

るから、われわれ「衆生」も「坐禪」を行い、それを基盤として悟りの道を辦すべきであるとするのである。そしてこの「悟りの道」を辦するには「須休尋言逐語之解行」、「回光返照之退歩」。といつて、「衆生の世界」に向かう」とをやめた「坐禪」をすることである。そういうことにより、「身心脱落」としての「坐禪」となり、

さらに、「道本田通」、「宗乗自在」といった「悟りの世界」と一体となり、その発現としての「坐禪」となって、本来の面目が現前するとされるのである。これを図に示せば第五図のようになるであろう。即ち、塵埃という自我意識に執られた「衆生の世界」に向うのをやめ、それに代つたものとしての「坐禪」は、「悟りの世界」にあって、しかも、「身心脱落」と「衆生」そのものを踏えてはいるものの、「衆生の世界」の方向から窺い知ることの出来ない「悟りの世界」を基盤とし背景としているものとされているのである。

〔付 記〕

『普勸坐禪儀』を理解するためにノートしていくものであるが、現在校正の時点において多く訂正しなければならない箇所等（特に図表）が出てきているが、これも研究の一過程を示すものであるから、あえて訂正せず、そのままにしておいた。